

# Eureka XI

六年制通信 No.15 令和5年7月20日(木)号

## 性弱説

以前「人は生きるために、食べ物よりも物語を必要とすることがある」という言葉を紹介しました。覚えていますか。年齢を重ねるにつれ、この言葉は真実だと思います。体を養う、健康を維持する、そのためには適量の飲食物が必要です。人間も動物である以上当然のことです。しかし、人間が動物と異なるところはどんなに素晴らしい食べ物でもどんなに美味しい飲み物でも、それだけでは「生きてはいけない」のです。ギリシア神話では神様の飲む美酒をネクター（nectar）、食べるものをアンブロシア（ambrosia）と言いますが、私たち人間にこの二つを出されたとしても、私たちの精神はそれだけでは満足しないでしょう。私は最近、これは人間が生まれながらに弱いからではないかと思うようになりました。性善説や性悪説ではなく性弱説が正しいのではないかと。物語がないと生きてはいけないとはどういうことなのでしょう。自分の人生も一つの物語に違いないわけですから、私たちは日々物語を紡いで生きているわけです。しかしそれでは満足できない、もっとたくさんの物語が必要だと思う。それは自分が紡ぐ物語以外に膨大な量の物語があることを本能的に知っていて、つまり人間の数だけ自分とは違った物語があることをわかっていて、それを知りたいと願う。それはどうしてか。それは、これまでに紡がれてきた幾多の物語に感動したり、涙したり、笑ったり、発奮したり、慰められたり、要するに「心を動かされたい」からだろうと思います。こういう感情は人間だけのものだね。そして、自分以外の物語を求めのは、それにすがろうとする心があるからだという点で人間は弱い存在だと思うのです。

また私たちは何かを決断しようとするときも言葉にすがります。少なくとも私はそうです。例えば、前進したら成果があるかもしれないが大きな危険もある、そんなとき進むのを止めようと決心する場合「君子危うきに近寄らず」という言葉が自分の判断の支えになってくれます。逆に大いに危険があるかもしれないがここは前進すべきだと考えた時は「虎穴に入らずんば、虎子を得ず」というからな、などと考えます。人はここぞという時に自分を支えてくれる適切な言葉が必要なのですね。生きていく上で必要とする様々な物語は、ホメロス以来西洋にもたくさんあります。しかし自分の決断を支えてくれる言葉は、私の感覚かもしれませんが、西洋よりも東洋の思想に多くある気がします。『論語』や『孟子』などには「決断を支える言葉」が満載ですが、我が国で言えば、まずは佐藤一斎の『言志四録』（『言志録』、『言志後録』、『言志晩録』、『言志叢（てつ）録』の総称）がそれに当たるのではないのでしょうか。西郷隆盛の座右の書なのですからね。諸君もよかったら手に取ってごらん。また通信でも紹介するけどね。

## 夏休みのおすすめ

- ・若林正恭 『ナナメの夕暮れ』 (文春文庫)

生きていく上で自分の心に正直になろうとすると(正直な言動をとると)当然ながら周囲との軋轢が生じる。しかし周囲から浮こうが不思議がられようが、世間のみんなが従っているいわゆる常識的な行動に対する自分の「違和感」を止めようがない。そんな人間の生きにくさ。戦う哲学者として以前紹介した中島義道さんと何か共通する「正直さ」と「生きにくさ」を感じる本です。でも、実は私も、ひょっとしたら君も、この本に書かれているいくつかには同感するのではないかな。この本に勇気づけられる若者も、今の世の中だからこそ余計に、多くいるような気がします。

- ・渡部昇一 『知的生活の方法』 (講談社現代新書)

お会いしたことはないのですが、いくつかの書籍を通して私に「知的正直であること」を教えて下さった恩人です。私は高校3年か大学に入ったばかりか、その頃に読んで感動したのを昨日のこのように覚えています。博覧強記ぶりに驚いたわけです。読書生活のことを語った本ですが、あまり言われたいエピソードを紹介しましょう。この本の中で先生はクーラーの効用を書かれています。クーラーを活用すれば夏の2か月ほど避暑に出かけることもなく涼しい環境で本が読める、と。これ、君たちは何を当たり前のことをと思うでしょうが、当時学者でこんな「正直な」ことを言う人はいなかったのです。クーラーは体に良くないと思われていましたからね。体を冷やすのはよくないと。面白いでしょ。で、この本がベストセラーになってクーラーの注文が劇的に増えたから東芝は渡部先生に何台かプレゼントをしたという逸話があります。

- ・『アンデルセン童話集』 (全7冊 大畑末吉訳) (岩波文庫)

さて、どのくらい知っていますか。「人魚姫」、「みにくいアヒルの子」、「マッチ売りの少女」…。他にはいかがですか。この夏は童話を読んでみませんか。ちなみに、アンデルセンの『即興詩人』は森鷗外によって訳され、残念なことに翻訳の方が上手すぎて原作以上の出来だと言われています。私の先生もそうおっしゃっていました。

- ・『グリム童話集』 (全5冊 金田鬼一訳) (岩波文庫)

さて、どのくらい知っていますか。「白雪姫」、「赤ずきんちゃん」、「ヘンゼルとグレーテル」…。他にはいかがですか。案外知られていませんがグリムは兄弟なんですよ。兄はヤコブ・グリム、弟がヴィルヘルム・グリム。兄は言語学の分野で「グリムの法則」と呼ばれる音法則を発見した天才です。30巻以上の膨大なドイツ語辞典の編纂もしています。見たかったらおいで。三重中京大学にあったのを校長室に置いてあるから。

- ・『イソップ寓話集』 (中務哲郎訳) (岩波文庫)

西洋古典の分野において、現在最も信用のおける訳者です。最近も『オデュッセイア』を格調高い日本語で訳されました。さて、諸君はイソップをどのくらい知っていますか。「北風と太陽」、「アリとキリギリス」、「酸っぱい葡萄」、「ウサギとカメ」、「オオカミ少年」、「金の斧」…。他にはいかがですか。一つ一つは短いお話なので、一気に読まなくても大丈夫。好きな時に好きなだけ読んでいけばいいですよ。

BGMは Uru の 奇蹟 でした…。